



- 上田城～国分寺半日コース
- 上田城周辺2時間コース



文化財まち歩きマップ (上田城周辺コース)

真田幸村(信繁)の父・昌幸が海野郷から住人に移住させて町並みを作らせたのが起源。今は商店街になっているので、お気に入りの店を探すのもいいかも。

柳町
石畳の道路や長屋が軒を連ねる美しい町並みが特徴の柳町。紺屋町へ続く角に「保命水」があります。

本海野の紺屋職人を招いてつくられた紺屋町。染物のすすぎで水を汚す紺屋町は、城下町の西端に配置されました。



マップ作成
問い合わせ先
長野県教育委員会事務局
東信教育事務所総務課
電話:0267-31-0250
平成24年10月作成



①信濃国分寺跡（国史跡）

昭和38年から7次の発掘調査により僧寺と尼寺跡が確認され、最近では僧寺南大門跡や西門跡の遺構も検出された。僧寺と尼寺がこれだけ近い距離にある国分寺跡は極めて珍しい。史跡公園として整備されたが、更なる保存整備をめざして計画が進行している。

また、国道の北側には国分寺の補修用屋根瓦を焼いた瓦窯跡2基が観察施設として整備されていて保存活用が図られている。資料館には信濃国分寺の復元模型や関係資料が展示されているほか、古代遺跡として発掘調査した他田塚古墳（おさだづかこふん）がレプリカで再現、出土した鎧や直刀などの遺物も展示されている。



②信濃国分寺三重塔（国重要文化財）

三重塔は室町時代中期に建立されたもので、和様を主体に一部禅宗様も取り入れられている。民家と渾然としたなかに美しい曲線でそった塔の庇（ひさし）が印象的。



③信濃国分寺本堂（県宝）

万延元年の竣工。長野の善光寺の三分の一の大きさだと言われる本堂は薬師堂とも呼ばれ、地元の彫刻士竹内八十吉（たけうちやそきち）の見事な彫刻が刻まれていて、薬師如来が安置されている。

毎年1月7日から8日には八日堂縁日のお祭り客でにぎわう。国選択無形民俗文化財となっている蘇民将来符の領布も忘れてはならない存在である。



④旧常田館製糸場施設（国重要文化財）

笠原工業に残る製糸工場の遺産は、明治・大正期に隆盛を極め、「蚕都(さんと)」とうたわれた当上田地域の製糸工場に関連する建造物が、セットとして残っていることにその価値が集約されている。製糸工場には、直接生産の工場だけでなく、従業員の衣・食・住に加え、文化施設や医療施設までも包括的に備えていたが、戦後の製糸業の衰退の中でこれらの工場は次々と姿を消していった。笠原工業常田館製糸場においても、かつてあった娯楽場や病室は失われてしまっているものの、近代製糸工場の前述の特徴を示す建物群がまとまって残っているのは、県内ではここだけとなっている。



⑤上田蚕種協業組合事務棟（国登録文化財）

大正6年（1917）に竣工した木造二階建て・瓦葺の建物で、外観は洋風であるが内部は和風となっている。蚕都上田の栄光を今日に伝える貴重な建物と言えよう。最盛期には、22万箱の蚕種がこの協業組合から出荷されていた。



⑥信州大学繊維学部資料館（旧上田蚕糸専門 学校貯繭庫）（国登録文化財）

明治44年（1911）竣工のレンガ造りの建物で、旧上田蚕糸専門学校の開校時に、蚕の繭を貯蔵する倉庫（貯繭庫）として建てられた。周囲の装飾、開口部、基礎に色違いのレンガを使い、開口部と基礎には石も使って外観にアクセントをつけている。現在は、資料館として上田蚕糸専門学校から受け継がれた貴重な資料を展示している。



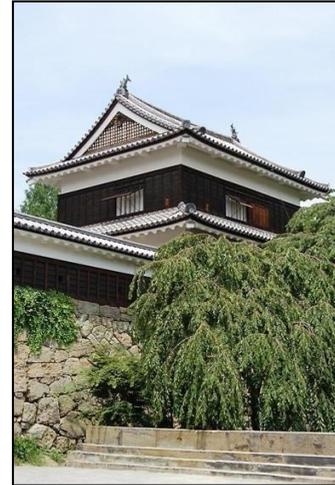
⑦信州大学繊維学部講堂（国登録文化財）

昭和4年（1929）に完成した木造二階建て・切妻造りの建物で、信州大学繊維学部の前身上田蚕糸専門学校にふさわしく桑・繭・蛾が意匠として随所に取り入れられている。内部の中央吹き上げ部分は、折上格天井になっており見ごたえがある。

⑧上田城跡（国史跡）・上田城櫓[南・北・西] （県宝）

徳川の大軍を天正13年（1585）と慶長5年（1600）の二度にわたって迎え、これを退けた城として広く知られている。平成19年に放映されたNHKのBS熱中夜話「日本の城」では、上田城が行ってみたい城のランキング1位に選ばれた。

上田城三櫓のうち解体を免れ現存しているのは西櫓のみで、北、南両櫓は一旦外部へ出ていたものが再移築されたものである。また、平成に入って櫓門やこの丸北虎口石垣が復元整備されてきた。ここは文化遺産としてだけではなく、市民生活憩いの場であったり、最近では観光の拠点として注目を集めている史跡でもある。そこで史跡と公園という観点から平成23年度には保存管理計画が策定された。また、合わせて平成2年度に策定した史跡の整備基本計画を改訂し、本丸七つ櫓のうち東北隅の櫓二棟と土堀の早期復元を、また市民会館移転後に武者溜まりの石垣や堀を整備していく目標を掲げている。このため学術的に発掘調査が現在行われているところである。



⑨上田市立博物館内・反射望遠鏡（国重要文化財）

江戸時代に作られた日本で一番古い天体望遠鏡。国友藤兵衛[くにともとうべえ]が作ったものだが、藤兵衛はこれを使って、その当時としては世界的な業績とされる太陽黒点の連続観察を行っている。藤兵衛は同じような天体望遠鏡を4～6台製作したとされているが、この資料は最初に完成した記念すべき製品。

この望遠鏡の特に優秀な点としては、金属製（銅約63%、錫[すず]約37%）の反射鏡が、主鏡・副鏡ともに今でも曇らずに輝いていることが挙げられる。最近の研究により、この反射鏡は金属がまじり合っただけのふつうの合金ではなく、銅原子と錫原子が結合して新しい物質となった「金属間化合物」であることがわかった。金属鏡のさびない理由は、これらの点にあるようだ。この望遠鏡は今でも天体観測に使えるものである。

